

# 森林の再生手法について

## 基本的な考え方

- 森林再生の目標は、標茶天然林試験地のような、多様な樹種、多段の階層構造と樹群をもつ広葉樹の天然林とする。
- 自然再生の取り組みにあたっては、自然復旧により回復が見込まれるところは自然にまかせることとし、事業は再生条件の悪い箇所でおこなう。

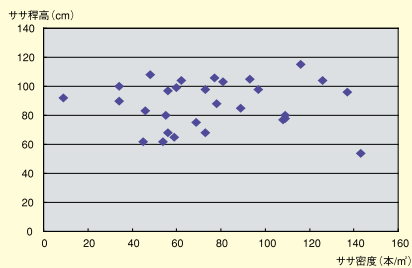


●標茶天然林試験地

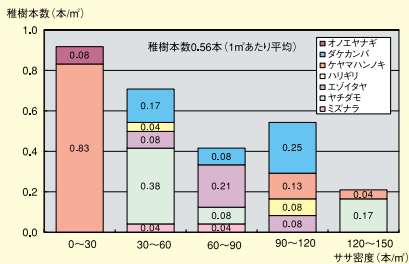
## 稚樹の発生状況

- 笹地内の調査では、ササの平均密度が73本/1m<sup>2</sup>、平均稈高が85cmで、広葉樹稚樹は1m<sup>2</sup>あたり、0.56本の生育状況であった。
- 天然林の調査では、林内では稚樹はみられなかったが、林道脇等のササが少ない箇所では、いろいろな樹種の稚樹が発生していた。

### ●ササ密度と稈高の分布



### ●ササ密度の違いによる稚樹生育本数



※ 稚樹定義：樹高30cm以上、胸高直径5cm未満

※ 稚樹本数：高木性広葉樹のものを採取（1m<sup>2</sup>あたり）

### ●林道脇、土場等の稚樹



## 再生手法の考え方について

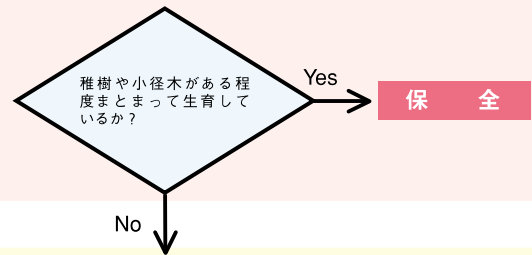
### ●再生手法の種類と優先順

- 森林の再生の手法は、大きく分けて保全と天然更新と人工植栽とする。
- 「天然更新」は、天然の力で次世代となる種子を供給する方法である。
- 「人工植栽」は、人力により苗木等を供給する方法である。
- なるべく自然に任せるという観点から、手法の選択には、人工植栽より天然更新を優先させ、天然更新より保全することを優先させる。

### ●再生手法の選択フロー

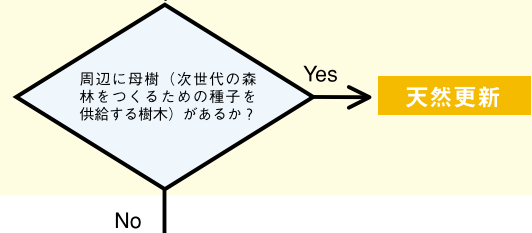
#### (1) そのまま保全

ある箇所に稚樹や小径木がま  
とまって生育していて、手をつ  
けなくとも再生が可能と思わ  
れる場合は、そのまま保全する。



#### (2) 天然更新

ある箇所に稚樹や小径木がま  
とまって生育していないで、周  
辺に母樹となる樹木がある場  
合には、天然更新を実施する。



#### (3) 人工植栽

ある箇所に稚樹や小径木がま  
とまって生育していないで、周  
辺に母樹となる樹木もない場  
合には、人工植栽を実施する。



再生手法の選択フロー

## ササの除去について

- 種子の定着や苗木の生長のためには、地表に障害物がある場合、これを取り除く必要がある。
- 雷別地区の場合、地表はオオクマザサに覆われており、天然更新や人工植栽をおこなう場合には、このササを除去する必要がある。
- オオクマザサのようなミヤコザサ系統のササは、特に地下茎の密度が高く、ササの中では回復力が大きいといわれている。
- このため、ササを除去する場合には、できるだけササの地下茎までとり除くようにする。

### ●ササの除去

